

流石に宗祖に憚られてのことであらふと察せられる。

併し又一説には、宗祖も參内の折は、いつも香衣を召されたのだと云ふ様な説もある。現に小金の東漸寺に香衣の大師像が在つて、寺傳では、法蓮房信空の作だと傳へてゐる。鸞宿上人は、その縁起を書かれたと云ふことであるが、惜しいことには今日傳つてをらぬ。思ふに宗祖は、自ら烏帽子もきぬ男だと稱してゐられた位であるから、是はやつぱり、後人が着せまゐらせたものを見るが、寧ろ穩當ではないかと自分は考へる。(大正二二、九、二五)

選擇の中心と其の兩面

梅 村 舜 道

第一序 論

第二 曼陀羅圖

第三 概 說

第一序 論

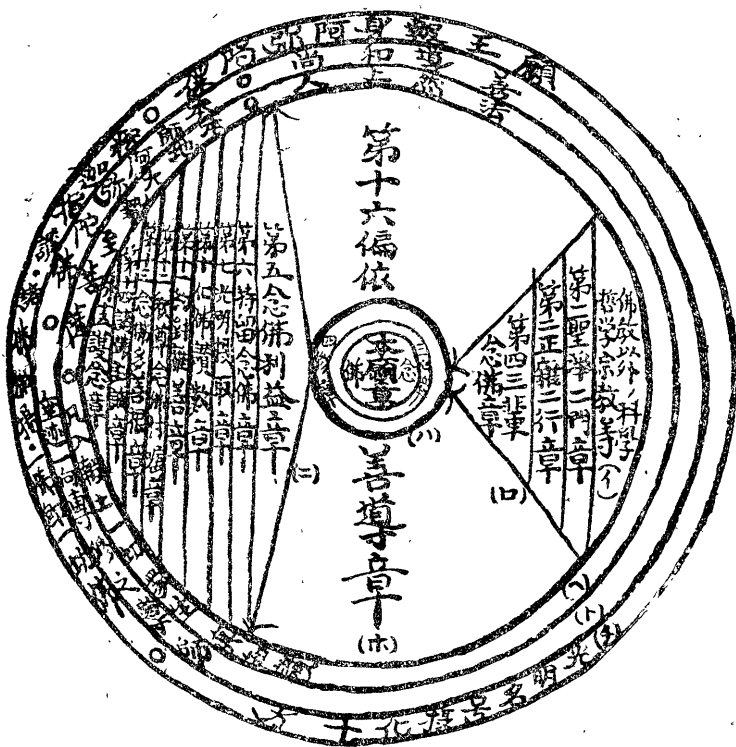
宗祖大師の靈格の體驗がありて、後に選擇集一部十六章が現はれたのである。選擇集の組織選述が

ありて、後に宗祖の靈格が現はれたのではない。此れば見易い道理であり乍ら、學解に囚はれたる人は往々此の道行きを誤るのである。

宗祖の靈格の體驗は、即ち南無阿彌陀佛で、南無阿彌陀佛は即ち一代藏經の歸趣で、法界真理の極成、衆生救濟の焦點、轉迷開悟の通入門である。故に選擇集一部十六章段の肝要は唯南無阿彌陀佛の外には何物も無い。故に本集の劈頭に題して曰はく。南無阿彌陀佛と。此の深意は唯實行の體驗に依りて味ふより外更に道は無い。百千の議論はいよゝゝ斯の本道より遠かるのみである。若し夫れ實修實行を先きとして、斯の一部を開けば、章々皆此れ金玉、句々是れ悉く靈韻である。今愁に論説を企つること既に宗祖不順の子、無慚の至りである。有信の高士は乃ち之を捨てよ。唯夫れ初心迷路の人の爲に皓月の一指ともならば即ち望外の幸とすべきである。

乃ち選擇集十六章を一曼陀羅圖として示すこと如左。

第二曼陀羅圖



第三概 説

(イ) の佛教以外の科學哲學宗教等とは。抑々現代東西の思想混亂し、百科の學起り、隨つて宗教の權威地に墜ち、殊に佛光も爲めに曖昧の裡に葬られむとするは頗る慨すべき事である。然るに吾人の心靈最終の歸趣は須らく明快なる選擇取捨を以て唯一勝道を攝取せざるべからざるのである。宗祖出現の當時にありては、發願歸三寶の第一歩に於て、既に唯佛道無上法に歸して猛進せられ、眞の求道者は更に餘道に動かされざるに依りて、佛道修行者に取りては、一般に此の取捨選擇は堅實なるものであつた。宗祖は固より此の第一歩の取捨選擇に低迷せらるゝ方でなかつたことは明かである。翻つて現代を顧み、吾人の運命を察するに、一面文化燦然の世として誇りつゝ而も其の實吾人の心靈の歸趣に至りては、混亂低迷洵に浩歎に堪へざるものがある。有心の人は須らく沈潛内察、斯の昏朦を排して、不動の取捨選擇を謬つてならぬことゝ惟はれる。即ち勇猛を鼓して佛陀の無上法に歸すべきである。

(ロ) は曰はく淨土宗も又一代佛教を攝して、此を聖道淨土の二門と見たつるのである。而も此の二門の中、吾人の時機を顧みて聖道の辿りを捨て、唯淨土の一門の通入を選び取るのである。淨土一門の中に於て正雜二行のある中、其の得失を察して、雜行を捨て、唯正行を取るのである。又五種

の正行のある中、正定の本願に據りて、前三後一を傍らにして、唯第四に稱名號を専らにするのである。かくて經文の上に於て、善導の釋義に依りて、諸行を廢して、又唯念佛を取る所以を明かにするのである。

(ハ) は彌々口稱念佛の一行に定つたと云ふ所以は、外にあらずして、即ち彼の佛の本願に據るからである。是れ第三章に本願を明かされたる所以である。然らば阿彌陀佛は何が故に、諸行を捨て、唯稱名念佛を本願と爲し給ふ乎に就き、宗祖は二つの理由を擧げられて居る。即ち第一は勝劣の義で諸行は劣り、念佛は勝ぐれておるからである。第二は諸行は修し難く、念佛は修し易いと云ふ難易の道理からである。難易の道理は思ふて之を知るべく、今且らく勝劣の義に就きて一言せむに、諸善の部分的の善なるに比して念佛は根本善であり總體善である、宗祖は此を萬德所歸の名號と言はれた。此の萬德所歸の名號と云ふ時は正しくは阿彌陀の三字であるが、此の萬德所歸に就きては、名大不離と申す原理があるからである。凡そ物あれば必ず名あり、名は必ず體を現はす。非情は自ら動かざれども、有情者此を呼べば何等から寫像と共に作用を示す。有情の名に至りては敏と鈍との別あれども必ず名を呼びて體を徴す。犬猫の類此を思ふべく、人に在りて更に俊なるのである。況や神通者其の名を呼ぶに、體現何の不可あらうか。況や其の本願あるに於ておやである。惟ふて之を信知すべきである。今阿彌陀の名號と名大不離と申す原理に就きて、選擇集の文に徴するに左の如くである。大と

云ふは體と相と用との三大である。萬物之を備ふ。彌陀報身の三大圓融の妙果を偲ぶべきである。

(一) 體大。文に曰く、三身、四智、十力、四無畏等。

(二) 相大。文に曰く、相好光明等。

(三) 用大。文に曰く、說法利生等。

凡そ此等の三大阿彌陀の三字と離れざるが故に名大不離である。名大不離なるが故に萬德所歸である。萬德所歸なるが故に、超勝獨妙にして、諸善と比較すべからざるものである。之を以て阿彌陀佛因時に於て此の理を思惟まし、其の劣れるを捨て、其の勝ぐれたるものを取りて以て本願と建て給ひしなるべしと拜察すべきである。是れ第三本願章の意であつて、宗意の根源にあつて選擇唯一の燒點は唯茲所に歸するのである。此の本願の名號に我が全身心を舉げて歸命する姿が南無の二字である。是れ念佛には必須的要件なるが故に第八章に於て、三心の詳説ある所以である。されば念佛とは正しくは南無阿彌陀佛の體驗であつて、凡佛不離の姿である。宗祖は此を三心具足の名號と申されたのである。此の三心具足の名號の體驗者は其の當然として外界に四修の發現となるのである。是れ第九章に四修の明かされたる所以であつて、南無阿彌陀佛に三心も四修も籠るとは此の道理を仰せられたのである。

(二)は既に斯の唯一選擇の目標の確定したる上は、後の章段の説明は全く斯の一念佛の内包功德の

開顯である。斯の一にして全なる念佛の功能、徳用は到底筆舌の能く及ぶ所では無い。轉迷開悟の功能も、佛性開顯の道程も、淨佛國土の理想も、成就衆生の力用も、煩悶消滅も、三垢消散も、無畏精進道の開顯も、歡喜踴躍の大悅も、三世超過の一念も、生死解脱の大道も悉く具備せられて、更に何等の不足はないのである。之を以て一念大無上功德と歎せられ、特留此教となり、攝取不捨となり化佛の讚歎となり、雜善に約對して全比非較となり、釋尊の付嘱となり、多善根、勝善根、大善根と歎せられ、諸佛の證誠となり、亦復護念と現はれたのである。恐らく此にても宗祖は念佛の功能徳用の廣大なることを讚するには尙短かいと思召たであらうと察せられるのである。

(ホ)の第十六章段は一部の綱要、宗祖體現の表明であつて、偏に善導和尚に依りて決正せられたのである。是れは既に迂路の説明を超過した境地である。但し十六章一章即全章妙融である。

(ヘ)斯くして偉大なる宗祖法然上人の靈格は出現して、凡夫直ちに報土に入るの導師として、一切衆生の眞の知識と爲り給ふたのである。

(ト)是れは正しく大唐善導和尚の靈格の指南に據るものである。

(チ)此の導空二祖の出現は、全く願王彌陀の智願海より生れたものである。斯の彌陀の智願は唯釋迦佛此土に於て指讀し給ふのみならず、十方の諸佛同じく稱揚咨嗟して休み給はざる所である。一佛即ち一切佛、一切佛即ち一佛、三身妙融の佛境界は俄かに凡夫の揣摩を容さぬ。唯念佛道に依るべきである矣。(完)